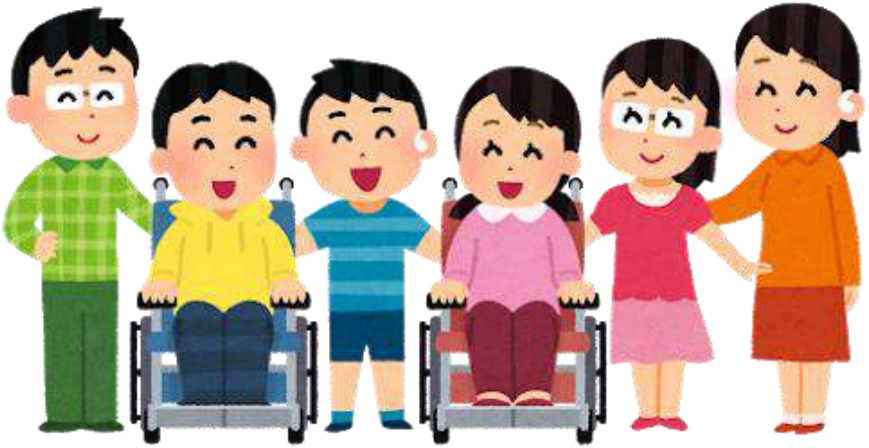
やってみよう！

障害理解教育



SSC Kyoto Prefecture Super Support Center

京都府スーパーサポートセンター

障害のある人と障害のない人、多様な人々が共に生きることのできる社会である「共生社会」を目指すためには、障害への理解が大切です。特別支援学級だけではなく、通常の学級においても支援が必要な子どもはいます。多様性を受け入れる心情と態度を育てる障害理解教育の授業をしてみませんか？

障害理解の段階

障害理解は、段階に応じた学習をすることで徐々に進むと考えることができます。子ども達の年齢や経験、理解の状況を踏まえ、その段階に応じた障害理解教育の内容を設定していきましょう。

第１段階 ＜気付き＞	障害のある人が社会に存在していることに気付く段階 ・いろいろな人がいることに気付く ・障害のある人に対するファミリアリティ（親しみ）向上の始まり
第２段階 ＜知識化＞	障害があるとはどういうことかを知る段階 ・自分の体の機能を知る ・障害の原因、症状、障害者の生活、障害者に対する接し方、エチケットやマナーなど、広範囲にわたる知識を得る
第３段階 ＜情緒的理解＞	障害のある人との直接的・間接的な接触をとおして、障害者の機能面での障害や社会的な痛みを「こころで感じる」段階 ・ネガティブな感情をもつことも含め、いろいろな体験をとおして、障害児・者をより身近に感じられるように、また受け入れられるように促し、教育する
第４段階 ＜態度形成＞	適切な認識（体験的裏付けをもった知識、障害観）が形成され、障害のある人に対する適正な態度が形成される段階 ・十分な第２段階、第３段階の体験が必要 ・適切な学習や、ポジティブな接触体験が大事
第５段階 ＜受容的行動＞	生活場面での受容、援助行動の発現の段階 ・自分たちの生活する社会的集団に障害のある人が参加することを当然のように受け入れ、援助行動が無理なく現れる

「はじめよう！障害理解教育～子どもの発達段階に沿った指導計画と授業例」
水野智美　編/著　2016 年　図書文化社　を参考に SSC が改編

障害理解の実践

障害理解教育を考える際に、以下の４つの視点をヒントに、授業を組み立ててみると、よりねらいに即した学習を進めることができます。

知る

〇障害のある方の生活、余暇活動、仕事、支援方法
〇身近なバリアフリーの施設・設備
〇図書室の本やインターネット等の活用

体験する

〇体験活動（難聴/アイマスク/車いす）
〇特別支援学校や特別支援学級の児童生徒と交流
〇高齢者施設に訪問

考える

〇体験で気付いたことの共有
〇身近な生活における改善点の確認
〇一緒に活動するための工夫

実践

〇学校や教室をみんなが使いやすいように工夫
〇お互いの思いやりや協力
〇生活の中で障害のある方とのふれあい

「障害者理解のための学習に関する教員研修資料集」平成 20 年
東京都教職員研修センターを参考に SSC が改編

体験だけで終わる授業ではなく、そこから何が分かったのかを考えることで、深い学びに結びつくような学習にすることが大切です。

「特別支援教育に関連して、障害者理解を推進することにより、周囲の人々が、障害のある人や子どもと共に学び合い生きる中で、公平性を確保しつつ社会の構成員としての基礎を作っていくことが重要である。次世代を担う子どもに対し、学校において、これを率先して進めていくことは、インクルーシブな社会の構築につながる。」

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進
（報告）概要　文部科学省　より抜粋」

知る

障害理解教育の例①（視覚障害）

視覚障害の人について知る

視覚障害

見えない　見えにくい

単眼鏡

タブレット

点字

視覚障害の人の中には、見えない人と見えにくい人がいます。

様々な機器を使って、自分で学習する工夫をしています。

視覚障害のある人の見え方は、人それぞれ違いがあることや、使用する機器や生活の工夫についての基礎知識を学びます。

体験する

やってみよう！体験めがね

視覚障害について知るためには、「見えない」「見えにくい」を「体験する」ことも１つの方法です。体験するために、身近なものを使って「体験めがね」を作ることができます。今回は、弱視体験として①混濁（白い濁りが生じた状態）の体験と②視野狭窄（見える範囲が周辺や中心から狭くなる状態）の体験ができるめがねを紹介します。

弱視体験①（混濁）

体験ポイント

〇似ている漢字、人の顔、情報量の多い資料集等、細かな違いや分かりにくさに気付く。

弱視体験②（視野狭窄）

体験ポイント

〇見える範囲が狭いこと、またそのために全体像がつかみにくい難しさがあることに気付く。

※体験めがねの作り方は、こちらの OR コードから⇒

考える

体験をとおして考えてほしいこと

体験をとおして、見えにくい、見えないことで自分は何に困ったかを、児童生徒に話し合わせます。また、困難さだけでなく、合わせてどんなことが手掛かりとなったか、どんな支援があれば安心できるのかなどについて考えることで、「自分ができること」について考えを深めることにつながります。

【話しかける】

「おはよう」と話しかけただけでは、誰に話しかけているのか分かりません。どうすればいいでしょうか?

- 相手の名前を呼んだ後、自分の名前を言う。
- 優しく肩を叩く。
- 話しかける時の合図を決めておく。

【授業を受ける】

眼鏡をかけても、黒板の文字が見えにくそうにしている友達がいます。どうすればいいでしょうか？

- 文字が見える位置まで座席を移動する。
- 読みやすい大きさで黒板に文字を書く。
- 読み上げながら黒板に文字を書く。

【一緒に遊ぶ】

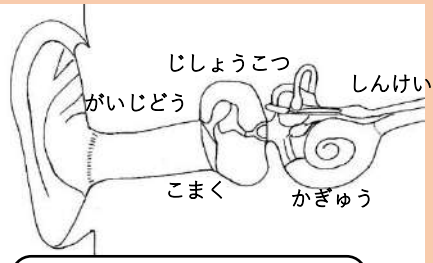
見えにくい友達とおにごっこをして遊ぶには、どんな工夫をすればいいでしょうか？

- おにの人はビブスを着用して分かりやすくする。またはおには鈴をもつ。
- 活動の範囲を決める。

知る

障害理解教育の例②（聴覚障害）

耳のしくみ



耳のしくみはこうなっています。
音には「大きい」「小さい」「高い」「低い」があります。

きこえにくい人はさまざまな方法で会話をしています。

耳のしくみやきこえない人の様子などを紹介することで、まずは聴覚障害についての基本的な知識を学びます。

体験する

きこえにくさを体験する

軽度難聴体験

８月１日、15時に学校集合ね！

え？？
なんて・・？

耳を塞いで聞く

聾体験

全く声を出しません。
なんと言っているか、分かりますか？

口の形だけでは違いが分からない

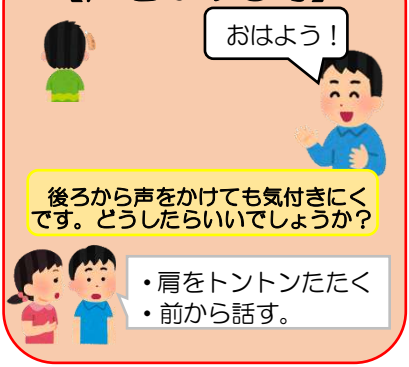
声を出さずに話す

きこえにくさを体験することで、日常生活や学校生活のどんな場面で困ることが出てくるか、みんなで一緒に考えることができます。

考える

きこえにくい人との関わり方を考える

【声をかける時】



【話し合いの時】

体験をした後に大切にしたいのは、「自分は何ができるか」というところまで、考えを深めることです。「もし〇〇の時、あなたならどんな工夫をしますか？/あなたならどんなことができますか？」ということを、児童生徒の普段の生活の中に落とし込んで、考えてみることも大切です。これが実践につながります。

聴覚障害にかかわる障害理解教育でも、「知る」「体験する」「考える」の流れで授業展開を考えると、子どもの興味・関心を高めて学習に取り組むことができます。子ども達に「聞くってどんなこと？」「聞こえにくい人ってどんな人？」ということを知ってもらった上で、聞こえにくい体験を行います。そして感じたことを元に関わり方などを考えると、「聞こえにくい人のことをもっと知りたい！」「他の障害のことも知りたい！」というような、深い学びへ繋げることができます。

理解教育を終えて･･･

- その人に分かるように伝えることが大切だと思いました。
- 生活の中の工夫が知りたいです。

（児童の感想文より抜粋）

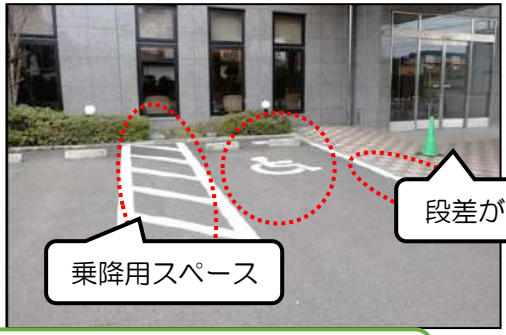
障害理解教育の例③
（「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」から考える）

具体的な障害種から考えるだけでなく、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」等の視点から、障害理解教育を考えることもできます。

＜授業の展開例①　駐車場にあるバリアフリー＞

知る

障害者のための国際シンボルマーク



この駐車場には、どのような人のための、どのような工夫があるでしょう？

入り口の一番近い場所で、このマークがある駐車場を見たことがある！他の駐車スペースよりも、広いように見えるなあ。

考える

よく気付いたね。なぜ他の駐車スペースよりも広くとってあるのか話し合ってみましょう。
また、ここに自転車を置くとどうなるでしょう。

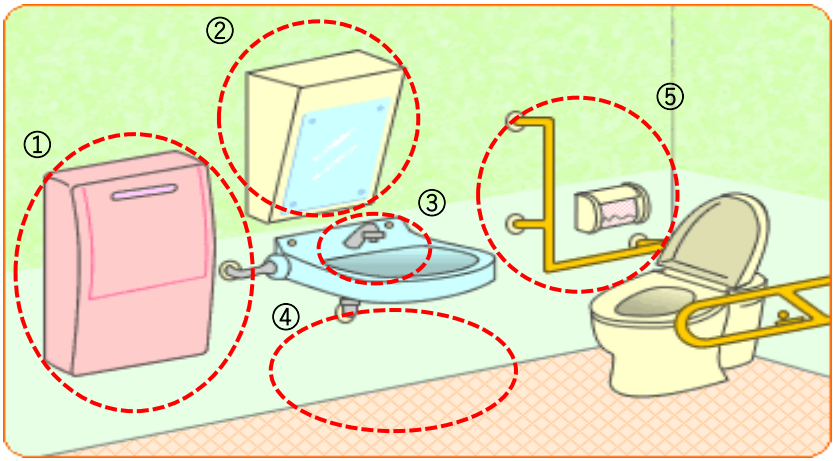
児童生徒にとって身近で見たことや聞いたことがあることを題材にして、興味を引き出しながら理解を深めていくことが大切です。

＜クイズ！いろいろなマーク知っていますか？＞

左から、補助犬マーク、聴覚障害者標識、ヘルプマーク、身体障害者標識、マタニティマーク

＜授業の展開例②　多目的トイレにあるユニバーサルデザイン＞

知る



出典：バリアフリー情報マップ　みやざき

このトイレには、どのような人のための、どのような工夫があるでしょう？たくさんの工夫がありますよ！

⑤は、車椅子に乗っている人にとって、手すりがあるから、移動に便利です！

①は、赤ちゃんがいる人にとって、おむつをかえるために便利な台になります！

障害がある人だけでなく、いろいろな人にとって便利な工夫が社会にはたくさんある、ということに気付くことも、障害理解教育を進める上で大切な視点です！

多目的トイレの工夫
①ベビーシート　②車いすの方でも見やすいように傾きがある鏡　③少ない力で水が出るレバーハンドルまたは自動で水が出る蛇口　④車いすやベビーカーでも入室できる広いスペース　⑤立ち上がったり、便座に移動したりするときに便利な手すり

障害理解教育の例④
体験をとおして「考える」学習へつなげる

障害理解教育を実施する際には、「車椅子体験」「補聴器体験」「アイマスク体験」等の体験活動を行うことで、より理解が深まります。ポイントは、体験だけで終わるのではなく、体験をとおして「何を考えるか」ということを明確にすることです。ここでは、視覚障害の例を参考にして説明します。

体験する

考える

めかくしじゃんけんをしてみよう！

＜ルール＞

①アイマスクをつける

②どんな工夫をしたらじゃんけんができるか考える

＜実際の授業で児童から出た意見＞

お互いの手を触れば、相手が何を出したか分かると思います！

お互いに声を出して何を出したか伝えたらいいと思います！（じゃんけんパー、など）

ジャッジをする人（見える人）がいればいいんじゃないかな？

見えない体験をとおして、見えない不便さがあることを知ると同時に、「どう工夫すれば一緒に遊べるか」を考えることで、「自分ができること」について振り返ることができ、障害のある人への適切な支援につながります。

考える

自分にできることを考えよう！

「白杖を持った人が歩いています。前方には、自転車が置いてあります。あなたなら、どうしますか?」

＜考えるポイント＞

- 点字ブロック状に自転車がとまっている設定で、より具体的に考えられるようにする。
- 視覚障害のある人への直接的な支援だけでなく、周りの環境（道）にも着目できるようにする。

＜実際の授業で児童から出た意見＞

視覚障害のある人に、「前に自転車があります」と伝えたらいいと思います！

視覚障害のある人に声をかけて少し待ってもらい、その間に僕が自転車を移動させます！

カラーコーンを自転車に見立てて置き、実際に動いてみたり、班ごとに発表したりすることもできます。視覚障害の方への「正しい支援の仕方」だけでなく、自分なら何ができるかを考えること、普段からできる環境づくりとは何かについて目を向けることが大切です！

参考資料

※タイトルの５０音順

- 「『気になる子たち』理解教育のきほんークラスみんなで学ぶ障害者理解教育授業の進め方」曽山和彦（編）（株）教育開発研究所　2016 年
- 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」　文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm
- 京都府総合教育センター http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/cms/index.php?page_id=343
- 「障害者に関係するマークの一例　内閣府」 https://www8.cao.go.jp/shougai/mark/mark.html
- 「障害者理解のための学習に関する教員研修資料集」平成 20 年 東京都教職員研修センター https://www/kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h19/materials/h19_mat04_01.pdf
- 「政策会議　心のバリアフリーについて」 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/program.html
- 「道路の移動円滑化整備ガイドライン」　第６章　国土交通省
- 「はじめよう！障害理解教育～子どもの発達段階に沿った指導計画と授業例」水野智美　編/著　2016 年　図書文化社
- バリアフリー情報マップ　みやざき　http://m-bfree.pref.miyazaki.lg.jp/
- 「NHK　for　School」https://www.nhk.or.jp/school/

このリーフレットを作成するにあたり、京都教育大学教授の相澤雅文先生（府専門家チーム委員）に御助言いただきました。ありがとうございました。

「やってみよう！障害理解教育」

令和２年３月

京都府スーパーサポートセンター

〒611-0031　京都府宇治市広野町丸山10（京都府立宇治支援学校内）

京都府立宇治支援学校：TEL　0774-41-3701 / FAX　0774-45-2220

SSCスタッフへの直通電話　0774-41-3703

ホームページ　http://www.kyoto-be.ne.jp/uji-s/ssc/